

第三次小樽市観光基本計画策定委員会(第4回) 会議議事録

日時:2026年5月8日(金)13:00～

場所:小樽市保健所講堂

1. 開会(進行:事務局)

- ・ 小樽市より開催案内があった。
- ・ 小樽市より配布資料の確認があった。

2. 議事(進行:委員長)

(1) 第2回小樽市観光基本計画策定委員会振り返り【資料1】

- ・ 事務局より資料1について、各議事の概要をまとめたうえで、上位計画や市の観光動向調査、委員から出された意見に関して説明があった。
- ・ 質疑等なし。

(2) 観光立国推進基本計画(第5次)および第6期「北海道観光のくにづくり行動計画」【資料2】

- ・ 事務局より資料2について、各上位計画の要点をまとめたうえで説明があった。
- ・ 質疑等なし。

(3) 第二次小樽市観光基本計画(現計画)の施策振り返り(取組内容・実績)【資料3】

- ・ 事務局より資料3について、現計画の要点をまとめたうえで説明があった。
- ・ 質疑等なし。

(4) これまでの議論を踏まえた第三次小樽市観光基本計画の方向性に関する意見交換

- ・ 現計画の取組の内、次期計画においても継続すべき点、優先度を下げるまたは取りやめるべき施策、新たに盛り込むべき施策を意見いただきたい。
- ・ 個別に委員より意見があった。
- 資料3には多様な取組がなされてきた旨が記載されているが、それらが小樽市の観光振興に活かされているのかが実感できていない。2027年上半旬に新たに3軒の宿泊施設が増えるため、地元の物品が地域内で消費される機会が増えるのではないかと考える。現段階で施策に対する意見はない。
- 第1次小樽市観光基本計画から現在において、様々なことを行ってきたが、結果が出て前に進んだと感じている。特に、冬季における観光振興が弱いと言われていたが、アジア圏の観光客が冬を体験しにくるようになった。データ上でも夏季と同程度の観光客数となっている。これはイベント開催等の取組の成果として評価できる。第

3次小樽市観光基本計画では小樽市民への広がりについて、どのように市民への浸透を図って進めていくのかが重要と考える。第2次小樽市観光基本計画の期間においては、日本遺産や、歴史風致維持向上計画をどのように位置づけるかも重要と考える。

- 小樽市観光基本計画の3本柱の1つ、小樽の魅力を共有する方向性について、十分とは言えないと考える。オーバーツーリズムなどの問題を踏まえ、市民の観光に対する理解や、市民が観光のメリットを実感できるよう考えていきたい。
- これからも継続評価すべき施策として、通過型から滞在型へという課題があるが、小樽において完結型の観光は厳しいと考える。北後志地域との連携強化を継続的に評価すべきと考える。小樽市には200件の観光資源があると言われているが、そこに行くまでの移動手段が問題であり、結果的に運河依存の構造になっている。例えば天狗山と街中の移動手段に課題がある。過去に自動運転バスの実証実験があったが、それらを天狗山や祝津方面への移動に活用できないかと考えている。取りやめてもいい施策は基本的にはないが、40名以上いる観光大使の活動実態や報酬について情報がなく、必要性を実感できていない。また、観光に関するパンフレットが乱立しており、精査が必要と考える。更に、ニシンの歴史や北前船の歴史等の文化発信を強化すべきである。札幌にも近く、レトロなイメージは維持しつつ、小樽市の衰退も小樽市の見どころとして捉え、浅草橋でのイベントについては、第3倉庫周辺に変更し、静かな小樽運河を見ていただきたい。また、運河周辺のライトアップは改善が必要であり、お金をかけ、運河のガス灯の点灯時間も来訪者目線で改善いただきたい。
- 市民が多く関与できる施策が重要と感じている。資料3において、市民が関与できる取組として、フィルムコミッションとイベントが挙げられる。フィルムコミッションの需要は減ってきている。近年はロケ地巡りがインバウンドに人気であり、フィルムコミッションは市民が関わりやすいので盛り上げていただきたい。雪あかりの路については市民ボランティアが多く関与しているが、海外ボランティアばかり注目されている。市民ボランティアにも焦点を当てていただきたい。その他、レールカーニバル等のイベントにおいても、行政が旗振り役としてリードしていただきたい。クルーズ船の入港は減少傾向にあり、ターミナル周辺でガイドしていると、出迎いのクオリティについて冷ややかなコメントをいただくこともある。他の寄港地とターミナルの印象を比較され、寂しいと感じられてしまっている点を強く認識していただき、工夫していただきたい。
- 重点的に取り組むべき施策として、トイレを充実させるべきである。特に鉄道の輸送人員数と女性用トイレ数を比較した場合の供給不足が生じている現状がある。これは旅行の満足度にも影響すると考える。また、倶知安町では宿泊税を活用して住民への還元を行っているので参考にし、市民をターゲットとした施策も盛り込みたく考

える。更に、宿泊税を住民が主体となった文化伝統の継承へ使うことも考えられる。また、北海道新幹線の開通も見据え、検討のあり方について記載が必要ではないかと考えている。

- 歴史や文化のストーリーを伝える際に、ガイドが見せたい場所や物が地理的にまとまっていないので交通面に関する施策が必要と考える。また、そのようなストーリーを学ぶことを好むターゲット像を明らかにし、そこから導き出される情報をパンフレットに載せる情報として整理してはどうか。各施策の優先順位を整理することも必要と考える。
- 第二次小樽市観光基本計画期間中には北海道胆振東部地震やコロナがあり、北海道胆振東部地震の際にはいち早く観光客の避難所を設置する等柔軟に対応しており、観光客の安心安全につながるような施策がなされていた点は評価できる。そのような取組の結果、近年の傾向として宿泊数が過去最高を記録しているので効果は出ていると認識している。受け入れ環境の整備や住民の生活の質の確保、住民と来訪者の安心安全と共生などはより一層注力して実施していくべきと考える。
- クルーズ船来訪時の出迎えは、市民参加型としてブラスバンドを有償で起用し、ボランティアに依存するのではなく、演奏者としても観覧者としても住民が楽しめる形にしてはどうか。運河のライトアップは強化すべきである。また、各取組についてボランティアで関わりたいと考える市民は少ないと考える。地域内クーポンや少額でも現金などの報酬はあるべきであり、既存のボランティア以上の関与が期待できる。ウィングベイ小樽は立地がいいので、利用者を増やし、コストがかかる点は承知しているが、イベント時などに安価に宿泊できるようにしてはいかがか。
- 体験型コンテンツを強化すべきと考える。単なる景観ではなく、ストーリーを軸に観光客と住民が自然に交わる接点の設計が重要と感じている。エリア偏在を改善させるため町全体を回遊できるようストーリーを活用した動線づくりも必要と考える。担い手の育成については小規模な事業者が継続して連携していける仕組みづくりに投資すべきであると考え。見直すべき施策として、観光客の増加のみを目的とする姿勢から脱却し、日常的な魅力の常設化が必要である。近年の若手プレイヤーの増加を踏まえ、短期滞在クリエイターの受入・支援施策が必要と考える。観光DXでは単に情報量を増やすのではなく、小樽らしい体験をどのように編集していくのが重要と考える。特にローカル文化との接続や市民目線のおすすめ等、感情を含めた視点が重要であると考え。俯瞰して、どのように関わるか、どのように誇りを持てるかを重視した計画としたい。
- ゴールデンウィークでは来訪者の偏在の実態を再認識した。来訪者数は一定数あるため、どのように回遊させるかという方向性で施策を展開できれば他の地域よりも比較的容易に課題を解決できると考える。取りやめるべき施策はないが、マーケティングやDXの数字をどのように生かしていくかが重要と考える。また、市民生活を守

る方法は様々あるが、特に経済面で守っていくべきと考える。生活での多少の負荷も経済的な豊かさでカバーし、街を維持したい。

- SNS の重要性が高まる中、素材は豊富にあるものの広告運用ができるクリエイターが不足している。プロのクリエイターと連携し実施すべきであり、ターゲットへ直接リーチできる点が強みである。また、これまで実施してきたイベントは個別には成功しているが、市全体の変化につながっているかは不明であり、より広い視点での施策が必要である。観光は裾野が広い産業として捉えるだけでなく、移住による人口の社会増を実現する手段として位置づけ、セカンドライフ層や子育て世代への移住促進につなげることが重要であるとする。
- 宿泊施設の立場からは、取りやめるべき施策はないものの優先順位の設定が必要であり、宿泊施設の増加に伴い二次交通や夜間の飲食環境の充実などを一体的に進めなければ、リピーター減少につながる懸念がある。また、小樽は徒歩圏内で観光が完結するコンパクトさが強みである一方、その他の観光施設は分散しているため、特に冬季における荷物移動の利便性向上などの雪対策が求められる。さらに、観光施策は市民理解の醸成と並行して進める必要があり、観光客と市民の双方が納得できる仕組みの構築が重要である。
- 自分が所属する団体では経済の活性化を念頭に置いた話し合いがされており、後志との連携が重要視されている。また、第2次小樽市観光基本計画では山の潜在力に着目されてきたが、現在は海の潜在力に注目している。宿泊施設においては後志地区ではキャパシティが2700室程度であり、規制撤廃等で宿泊施設を増やせる可能性がある点についても議論がなされている。基本軸の「ホンモノの小樽」というキーワードは見直したい。また、山がクローズアップされているが、海にも同様にして着目いただきたい。来訪者の質の向上も大きな課題であり、宿泊客が夜にゆったり観光できるような施策も必要であるとする。数値目標として本計画でKPIを定めるべきとする。国や道の方針では地方部の受け入れ強化が重要であると認識しているので、それに沿った施策も展開していく必要があると感じている。
- 今後の施策に関して、小樽の観光において本物が何を指すのか、委員からの意見も多かった市民の観光への関心と理解の促進、オーバーツーリズムや地域偏在の改善が上位計画に示されている持続可能性に繋がっており、重要性を再認識した。また、第3次小樽市観光基本計画ではより観光DXを強化し、AIを活用し、効率的に競争力をつけていくことが重要であるとする。
- 資料中、観光客と市民の触れ合いについて言及されているが、その前提として、市民の満足度と安心感が確保されていなければ、観光客との触れ合いやおもてなしにはつながらないと考える。したがって、市民の満足度と安心感を主軸として捉える必要がある。高単価の飲食店の増加や、SNS 社会において観光客を受け入れるリスクなどが市民の安心感や満足度を低下させる要因として考えられる。また、小樽市の変

化すべき点と残していく点を見極めなければならない。歴史文化は残していかなければならず、特に第3倉庫を単純なカフェにするのではなく、一例ではあるが歴史文化を発信する拠点にしていきたい。市民が集い、市民の賛同が得られる場が必要であると考えている。

(事務局アドバイザー)

- 本委員会では小樽市観光基本計画の大きなビジョンを定めるという骨格があると認識している。委員の意見を集約し反映させていく。行政単体ではできないこともあるので小樽が一体となり観光に取り組んでいきたい。先を見据えた中で計画の策定に臨んでいきたい。
- 市が定めた10年間の基本計画(小樽市観光基本計画)を受け、DMOとして4~5年間の経営戦略を策定ししなやかに実行していくつもりである。ふれあい観光大使に関する詳細な情報については、観光協会のHPにて情報を公開している。各人の日々の生活の中で小樽をPRしていただく趣旨であるので、活動の強制力がなく活動の内容に濃淡は生じてしまう点を理解いただきたい。
- 小樽は歴史と文化のまちであるという共通認識のもと、観光との連携が進められている。例えば、昨年修理工事を終えてリニューアルした旧日本郵船小樽支店では、日比谷花壇が指定管理者として多様な活動を展開しており、今年3月には入館者数が2万人に達した。このように文化財の活用を進めることで、観光客の誘客だけでなく、市民の文化財や地域の歴史への関心の向上にもつながっていると認識している。
- 商工会議所では、入込客数の増加のみならず、小樽経済への寄与を重視した「稼ぐ観光」をキーワードとしている。また、市の課題として人口増加も認識されており、移住等のきっかけとして観光を位置付けることも可能である。こうした取組は、人口増加を通じて持続可能な観光振興にも寄与するものと考えられる。

(事務局)

- 委員からは幅広い意見が出され、主なポイントとして、文化・歴史、広域観光、観光客と市民の共存、市民理解の促進、稼ぐ力等が挙げられた。これらが今後の検討における主要なキーワードであると認識している。また、国の観光立国推進基本計画では、地方自治体においては、観光部局に限らず各部局が横断的に連携し、総合的に取り組む役割が明確にされている。本委員会での議論内容については、関係部署とも共有し、市全体として観光振興を推進していく予定である。

3. 閉会

- ・ 小樽市より閉会の挨拶。
- ・ これまでKPIは小樽市総合計画で定めており、第2次観光基本計画には定めていない。本委員会において量から質への転換などの論点が挙げられており、本計画内で数値目標(K

GI等)を定めることも含め、今後議論を深めたい。

- ・ これまでは委員からの意見を収集してきたが、今後の委員会では計画の素案をベースにご意見をいただき、計画を作り上げていく予定である。
- ・ 第5回委員会は次期計画の方向性となる柱を整理するとともに、基本理念を中心に議論する予定。6月12日(金曜日)、保健所講堂にて実施予定。

<配布資料>

- 会議次第
- 座席表
- 委員名簿
- 【資料1】第三次小樽市観光基本計画策定委員会(第3回)議事概要
- 【資料2】観光立国推進基本計画(第5次)および第6期「北海道観光のくにづくり行動計画」概要
- 【資料3】第二次小樽市観光基本計画(現計画)の施策振返り(取組内容・実績)